

講座

子どもをめぐる人間関係 2

園における幼児の仲間関係

柴坂寿子

1. 子ども達の生活の場としての園

日本における幼児の保育園・幼稚園などへの就園率はすでに90%以上に達している。現在の幼児は主に「家庭」と「保育園・幼稚園」の2カ所で生活し、育っていくとも言える。

園には保育者という大人との関係の他に、「仲間」という子ども達同士の人間関係が存在する。本稿では、この仲間関係に焦点を当て、園の中で子どもが仲間とどのようにつきあっているか、どのような体験をし、そのことでどのように育っていくのかを考えたい。

その際、いくつかの具体例をとりあげ、事例を通して考えたい。具体例は筆者と共同研究者の倉持がこの数年に幾つかの園で観察させていただき得た資料（倉持と柴坂 1996；柴坂と倉持 1999；その他未発表資料）と、子ども達の仲間関係を長期的な視点で捉えた、村田と友定（1999）及び森上と今井（1992）の著書から採って紹介する。

ここで取り上げる園はどれも、自由遊びを中心とした保育を行っている園である。子ども達は自分でやりたい遊びを選んで遊び、保育者は材料や遊具を準備したり、子ども達と一緒に遊びながら遊びの援助をする。また一斉での製作や歌なども適宜取り入れられている。

2. 仲間と遊ぶ

子ども達が園で仲間と遊ぼうとしても、それがスムーズに行かないこともある。そのような時、自分の得意な活動を支えとして、仲間との遊びを実現させていく子ども達がいる。



Hisako SHIBASAKA お茶の水女子大学
生活科学部専任講師

著者紹介【略歴】お茶の水女子大学理学部卒、同大学院理学研究科生物学専攻修了。理学博士（京都大学）。マックス・プランク行動生理学研究所研究員を経て、現在に至る。【専門分野】

人間行動学。【連絡先】〒112-8610 東京都文京区大塚2-1-1（勤務先）。

(1) 製作の得意なS夫

S夫は4月に年長クラス（持ち上がりの2年目）に転入してきた。転入当初はクラスになかなかなじまず、滑り台で寝っ転がってふてているような姿を見ることがあった。しかし7月頃までにはだんだん園生活にも慣れ、製作を好んでするようになってきた。さらに製作物を介して仲間と遊ぼうとする姿も見られるようになった。

〈K夫達のままごとへの仲間入り〉

年長7月。ままごとコーナーでK夫・A子・S子・R子でお姫様ごっこをしている。S夫はちょっと離れた製作コーナーで製作をしている。K夫が席を外している時に、それまで製作していたS夫が、「なにしてんの?」「いれてー」と仲間入りしようとする。「王子様は空いていないよ」「家来だけ」と言われるが、結局王様として入ることになる。S夫は剣を腰に差す。先ほどS夫が製作していたのはこの剣だった。K夫が戻ってくる。「S夫入ったの?王子様?」と聞くがS夫は答えない。K夫はS夫の剣を見て「剣ずるいよー」と羨ましそうに言う。

ご飯を食べることになり、並べてあったご飯（ティッシュがお茶碗に入ったもの）が配られるが、途中から入ったS夫の分がなかった。S夫は「ティッシュは?（ご飯のこと）」と聞くがままごとコーナーにはティッシュがない。自分で製作コーナーにティッシュを取りにいき、茶碗に入れる。しばらくみんなでご飯を食べている。K夫がS夫に「辛いはいれたら?」と色紙のおかずをS夫の茶碗にいれる。S夫は「王様はこれ好きだから食べてんのね」と喜ぶ。ご飯が終ってみんなでおでかけすることになり、K夫はS夫に「俺先にいくねー」といってバイクで出ていく。S夫は後を追う。

この事例ではS夫が得意な製作を介して仲間に入ろうと試みている。最初、S夫は一見K夫たちの遊びとは無関係に製作して遊んでいるように見えたが、実はS夫はK夫達がお姫様ごっこをしているのを知ってい

て、そのごっこにあった小道具を作っていたのだった。別にK夫達が剣を使っていたわけではなく、S夫のアイデアだった。また遊びに関連する製作物を手に持つことがS夫が遊びに加わる勇気を支えていたようにも思われる。

S夫は入ってからもちっと緊張している様子であった。途中から入ったためにS夫の分のご飯がないという事態も起こる。しかしここですねたりせず自分の分のご飯を製作することで、遊びの流れと一緒に乗っていった。この後、K夫がおかずをわけてくれたことでS夫の緊張もすっかり解けた様子であった。

2学期に入ると、S夫が作る製作物が魅力的なので、それが他の子達の製作を刺激するようになってきた。このことがまた仲間との関係の中でのS夫の自信にも繋がったようである。次のエピソードでの、S夫の「だんだん人気になってきたなー」という発言にそれが感じられる。

〈ロボット作り〉

年長9月。昨日、S夫が考案したロボット（段ボールでできていて、子どもが中に入る）が人気になり、男の子たちはみんなロボットを作った。昨日休みだったK夫も今日になって同じ様なロボットを作っている。他の男の子2名がK夫のロボットの色塗りを手伝っている。

S夫が男の子1名と一緒に部屋にやってきて、K夫たちを見て、「だんだん人気になってきたなー」と嬉しそうに言う。K夫たちの色塗りが終わり、乾かすために窓際に置く。S夫はK夫達と一緒に水筒を持ってウルトラマンごっこをしに部屋を出る。

(2) 遊びのアイデアの豊富なゆたか

森上と今井(1992)には「基地ごっこに入れてもらえなかったゆたかのこと」として、およそ次のような内容の事例が報告されている(要約は柴坂の文責による)。

4, 5歳児5人がジャングルジムに登り、基地ごっこをしている。ゆたか(5歳)も一緒に遊びたいが、1週間以上仲間に入れてもらえなかった。基地遊びをしている子ども達には「仲間に入るとすぐ威張る」「ゆたかくんみたいに走りが遅いと発進の時待ってなくちゃいけない」等と言われていた。ゆたかは自分の体を動かすより、口で人を動かすことが多いこと、ゆたかは太っていたため他の子ども達のようにスピーディにジャングルジムをのぼり降りできないことを子ども達は指摘している。ゆたかはお話や絵本が好きで想

像力が豊かだったので、宇宙船や基地についても自分なりのイメージがあった。基地ごっこをしている子ども達のやることが自分のイメージに合わないと言出しするので、自分達のイメージで遊んでいる子ども達とトラブルになっていたようだった。また、ゆたかが口達者だったため、基地ごっこの子も達はゆたかを仲間に入れるとゆたかの言う通りになってしまうと警戒している様子もあった。さらに、ゆたかは仲間に入れてもらえない時に、ジャングルジムの下で、仲間に入れてもらえない怨みつらみを息巻いたり、基地ごっこをしている子が転ぶと嘲笑したりするので、ますます孤立していた。

ある日、「入れてもらえなかった」と気を落としてゆたかが部屋に入ってきた時、保育者は「入れてくれないから遊べないんじゃないかって、ゆたかくんが考えている基地ごっこをやってみたら…」と、仲間に加わるのではなく、自分で基地ごっこを始めてみるよう促す。保育者は彼の基地ごっこのイメージを話させ、そのためにはどのようなものが必要か等を一緒に考えた。ゆたかは自分なりの基地を作り始めるが、タイヤを一つ運んでは溜息をつき、「誰か手伝ってくれないかな」とぼやいていた。アイデアがあってもそれを実行に移せないでいたゆたかには、自分なりの基地を作るとは喜びであると同時に、アイデアを形として実現していくのは容易ではないと実感していたようだった。何とか基地を作っていると、クラスメートが二人寄ってきて興味を示し、「空飛ぶ円盤の基地」というゆたかのイメージに誘われて加わり、今までにない基地を作ることができた。

それから毎日のようにこの基地ごっこが続き、ゆたかが「発進」と言いながら基地を飛び出して、園庭を駆け回ったり、トランシーバーを作って仲間と交信するなどの姿が見られた。仲間も増え、ジャングルジムの基地と交戦したりするようにもなった。

今井が指摘するように、ゆたかは遊びのアイデアを豊富に持っているが、口で言うだけだったのでトラブルになっていたようだった。それが保育者の援助を受けて、アイデアを自分で具体的な活動に移すようにしたことでアイデアが形として見えるようになり、豊富なアイデアに惹かれて仲間の方がゆたかの遊びに加わるようになっていった。

S夫の場合もゆたかの場合も、自分の得意なこと・好きなことを発揮することが、仲間と遊ぶことに繋が

ったと考えられる。

3. 仲間を広げる

幼児においても仲間の中に何人か特定の仲良しができることが多い。その際「この子でなければ」と一人の子どもに固執すると、結局相手も自分自身も苦しくしてしまうようである。そのこだわりをある時捨てて、仲間を広げる体験をする子ども達がいる。村田と友定(1999)はおおよそ以下のようなM子の事例を報告している(要約は柴坂の文責による)。

4歳児で入園してきたM子は最初保育者と遊ぶことが多かったが、3学期頃から仲間と遊ぶようし始める。しかし自分の思うようになってくれる子どもとしかわらうとせず、相手に対して強い言動をしばしば見せ、結局相手が離れていくという状態だった。

5歳児進級でクラス替えがあり、4歳児で同じクラスだったK子と仲良くなる。しかしやはりK子だけと遊ぶとする傾向が強く、K子が他の子と遊ぶとすると、たとえ一緒に遊びに誘われても不安定になってしまっていた。年長10月にはM子とK子は大喧嘩をする。M子がお出かけで数日休んでいる間にK子がすっかりA子達と仲良くなり、M子が遊びに誘っても今A子達と遊んでいるからと断ったことがきっかけだった。その日のうちに二人は仲直りするが、その後K子はA子達と遊ぶことが多くなり、M子には不安定な様子が続いていた。

そんな中、年長11月にM子はお出かけで休んだ翌日、おみやげを持って登園する。お出かけの様子を話している間は機嫌がよかったが、昨日の続きのままごとが始まると入りにくい様子で保育室を出ていく。うろろろしながら昨年自分のいた年少組の保育室に入る。そこでピアノの得意なM子は年少児達と一緒に合奏をすることになる。その後M子は毎日のように年少組にでかけて合奏をするようになった。このことがきっかけで、M子はR子等他の年長児と相談して、全園児での合奏会を計画する。仲間の範囲がK子以外に大きく広がり、安定して遊べるようになった。

村田と友定が指摘するように、K子がM子の思い通りにならない強さを持っていたことがM子にとってはよい結果を生んだと考えられる。M子はK子へのこだわりを捨て、K子以外に目を向けざるを得ず、その結果、多分M子自身考えもしなかったであろう年少児達やもっと広い仲間関係の中に、自分の得意な

活動と一緒に楽しむ仲間を見つけていくことになった。

4. 仲間からのコントロールへの対処と仲間からの学び

仲間の中にはやたらと人に指図したがる子どももいる。指図する子どもには悪気はなくとも、指図される方は最初は従っていてもいつかどこかでつまらなくなるようだし、どこか重苦しい様子が見える。次のC子は仲間からのコントロールに対して、「従う」以外の対処を学んだ例である。

C子は2年間の園生活を通じて、仲間と遊ぶことの多い子どもだった。C子は特にB子とよく遊んでいたが、B子に何かと指示を受けてはそれに従うことを求められていた。B子とのままごとや学校ごっこでは、必ずB子はお母さん役・先生役で、C子は子ども役・生徒役であった。次のエピソードのように、年少時ではお母さん役・先生役のB子の指示に、子ども役・生徒役のC子がほとんど反発することなく従うのが常だった。

〈B子とC子のままごと①〉

年少2月。B子(お母さん)・C子(子ども)・E子(子ども)でおままごと。B子のバレンタインデーの話聞いて、C子が「バレンタインデーのチョコなら買ってきてあげる」と提案すると、B子は「そうじゃなくて、赤ちゃんの薬を買ってきて。薬っぱだよ」と別の指示を出す。C子は「はい」と答えてE子と一緒に裏庭に行き、薬をむしって戻ってくる。

C子が「お母さん買ってきたよ」とB子に報告すると、B子が「あそこのお鍋においてきて」と指示する。C子が「はい」と答えて台所道具のそばに行くと、B子は「あ、緑のお皿ね」と指示し直す。C子は「はい」と答えて皿に置く。

E子にC子が「夕飯どうしようか」と相談していると、B子が「夕飯、私が作るわ」と宣言する。C子が「じゃあ、材料持ってくるけど、乗せるテーブルがいるじゃない?」とB子に聞くと、B子が「テーブルも取ってきて」と指示する。C子はE子と相談して教室の方へ取りに行く。

しかしこうした関係にC子が不満を表す様子も次第に見られるようになって来る。年長1学期にはC子がB子に「いつもお母さん役ばかり」と文句を言ったり、「B子は私にいつも命令する。好きなようにしていいのにね」と発言することもあった。その頃ち

ようどC子はD子の猫ごっこに加わるようになった。D子は人間に命令されても自分のやりたいようにやる猫を演じていた(〈D子の猫〉)。それまで命令に従う従順な猫を演じていたC子(〈C子の猫①〉)も、猫をD子のように演じるようになった(〈C子の猫②〉)。(〈D子の猫〉)

年長10月。ホールで、D子(にゃーという名の猫)、E子(子ども)、F子(お母さん)、G子(みみという名の猫)がままごとをしている。

D子はF子に紐を引かれているが、D子が引っ張ってホールに入ってくる。D子は「匂いが」といって勝手に立ちどまり、四つん這いになって匂いを嗅ぐ。ホールにある家の窓の方に向かってF子を引っ張る。「違うでしょ」とF子に入口の方に引っ張られても引っ張り返し、「にゃーだけは窓から入る」と主張。窓から入る。F子に「夜遅いからもう出ないの」と言われても、無視して窓から出る。F子が「早く帰ってらっしゃいよ」と声をかける。G子が窓から入るのをD子が助ける。F子に「猫は手は使えない」と言われても、「マジシャンの猫だから手は使える」と言い返す。

〈C子の猫①〉

年長4月。ままごとコーナーでB子(お母さん)、C子(猫)、H子(お姉さん)、Z夫(お父さん)がままごとをしている。「みいちゃん」とH子が呼ぶとC子は頭を下げて可愛らしくうなずく。H子は「みいちゃん」といって頭をなでる。C子は四つん這いになっている。B子達が役の名前を決めている時、C子ははじっここのほうでおとなしくしている。

H子は「みいちゃん」とまた甘い声で叫び、なでる。ソファの上に乘ったC子にH子は「お水ほしい?」「おなか空いた?」と聞くがC子は「ううん」と首を横に振る。H子が「お手」というとC子はお手をし、「お回り」というとお回りをして「ニャア」と鳴く。H子が「みいちゃん、いいこ」といって頭をなでる。B子がH子に「甘やかしちゃだめよ」と注意するが、H子は「いや。猫を甘やかしたいんだもん。ねー、みいちゃん」と言ってC子を見る。Z夫がC子の背中をなでる。C子は四つん這いでニャンニャン言いながら移動し、ソファの上で寝る。B子は「にゃんにゃん」と呼んでなでる。

Z夫が仕事に出かけることになる。C子は「お父さん、いつてらっしゃいニャン」とおすわりして手を振る。

〈C子の猫②〉

年長7月。コーナーで女の子数名でままごとをしている。D子とC子が四つん這いで猫を演じている。D子がC子に「おい、綱渡りの練習するぞ」と誘う。I子が近づいて「危ないじゃないの、にゃんにゃん」と叱る。D子は「この綱なら大丈夫。いつも練習しているから大丈夫」と答える。

ここでU夫、V夫がD子達にちょっかいをかけてくる。C子が「いじめるな」と反撃し、D子は「ニャンニャン!」と攻撃的に鳴く。I子は「止めなよ」とU夫達を制止し、D子達に「噛みつけ!」とけしかける。二人のニャンニャン鳴く声がさらに攻撃的になる。

J子がコーナーに行き、「B子ちゃん、U夫くんがD子ちゃんをぶった」といいつける。B子達は「U夫、謝んなさいよ」と怒る。

V夫はまた「化け猫、化け猫」とはやす。女の子達は「噛みつき猫、行け!」「あっちから来た。行け!」と嬉しがってD子達を応援する。C子は一旦コーナーに逃げてくるが、女の子達の応援を受け、「ニャン!」とV夫に飛びつく。

C子はこうしたD子との遊びの時期を経て、年長後半では自分のやりたい活動を選んでいろいろな子どもと遊ぶようになった。B子と遊ぶ時間は以前より減少し、次のエピソードに見るように、B子とままごとをする時にも、子ども役のC子がお母さん役のB子が指示を出してもそれに従わなかったり、逆に要求を出したり、勝手に動き回ったりして、B子を振り回すようになった。

〈B子とC子のままごと②〉

年長11月。B子(お母さん)・C子(赤ちゃん)・D子(子ども)でおままごと。B子が布団を出していると、C子が「ミルクー」と足をばたばたさせ騒ぐ。B子はC子にミルクを飲ませ、もうおしまいというようにカップを振ると、C子は泣き顔で「ミルクー」と足をばたばたさせ騒ぐ。B子はうんざりしたように「今ミルクあげるから」と言う。

D子とB子でミルクを飲ませていると、C子はぶいっと飲むのを止め、這っていく。B子達はカップを片づける。B子がお絵かきをしているとC子がカップを持ってきて「B子ちゃん、これミルク」と見せる。それを受け取ったB子が何か指示するが、C子は「いや!」と怒って離れる。

B子がまたお絵かきを始めると、C子はいはいで

台所に行き、台所道具の入っている箱をいじる。それを見たD子がB子に「ばぶちゃんが包丁持っている」と報告する。B子は「ばぶちゃん、止めなさい」と走っていき、台所道具をいじくり回しているC子の手を取って止めさせる。

このように、C子はD子との遊びの中で、「コントロールを受けてもそれに必ず従う必要はないこと」を猫役として体験し、B子のコントロールに対しても「従う」だけでなく、別の選択肢を選べるようになったように思われる。

5. 仲間に目を向ける

園には多くの仲間がいる。しかし次の事例のU夫のように、すぐには仲間に目が向かず、だんだんに目を向けられるようになる子ども達もいる。

U夫は年少の終わり頃転入してきた。以前は家の都合で2カ所の住居を行ったり来たりした生活が続いていた。また前の幼稚園の時に病気で入院を経験している。

転入してしばらくは保育者のそばで過ごしていたが、その頃から注射の話など病院の話をよくしていた。そのうちマジックを毛虫に見立てて、小さな箱にマジックを並べ、「毛虫の病院」ごっこをするようになった。クラスで大型積み木で家造りをするのが流行ると、U夫も大型積み木で病院を作り、そこでぬいぐるみに点滴をしたりして「病院ごっこ」をするようになった。こうした病院ごっこはU夫の一人遊びが殆どで、ぶつぶつと独り言のようにせりふを言っていた。他の子が興味を持って「俺にもやらせて」と言ってもすぐには反応しなかったりと、自分の世界に入り込んでいる様子だった。この遊びは2学期始め頃まで繰り返し行われた。

「毛虫の病院ごっこ」が現れた頃にU夫はプラレールの「電車ごっこ」もやり始めた。以前行ったり来たりしていた時に使っていた路線名や駅名を独り言のように言って、電車をひとり動かしていた。この遊びは1カ月ほど続いた。

2学期に入ってクラスでキングブロックの電車作りが流行り、U夫も「電車ごっこ」を再開する。今度はキングブロックの電車に乗って動かして遊んでいた。この遊びでも初めは他の子とあまり関わろうとしなかったが（〈U夫の電車ごっこ①〉）、次第に電車に乗りたがる子を乗せるなど仲間との遊びに発展するようになる（〈U夫の電車ごっこ②〉）。

〈U夫の電車ごっこ①〉

年長9月。U夫がキングブロックの電車に乗り、踏切に見立てている積み木の所にさしかかる。U夫は自分で「キンキンキン」と警報機の音を出しながら電車から一旦降りて踏切を動かす。また電車に乗る。男の子二人が踏切を動かしたのが気になり、踏切を元に戻してまた一人で電車に乗る。

〈U夫の電車ごっこ②〉

年長10月。U夫はホールからキングブロックの電車に乗って廊下に出て教室に向かう。C子が「ほう、長い」と電車の長さを感じず。V夫が電車に乗ろうとすると、U夫は「だめ。駅で待ちなさい」と止める。駅に見立てられた場所でV夫が乗ってくる。U夫が電車を止めるのでV夫が「どうしたの?」と聞く。U夫は「ウルトラマンごっこでもどっちでもいいからやろう」とV夫を誘う。Q夫が「乗せて」と言って電車に乗る。U夫はまた運転手の口調に戻ってQ夫に何か言う。

年長1学期頃の一人遊びの病院ごっこや電車ごっこは、U夫にとっては、大変だった以前の自分の体験を見つめ直すためのもの、あくまでも自分のための活動だったのではないだろうか。他の子どもが関心を持ってきてもあまり喜ばなかったのもこのためではないかと思われる。U夫はこの長い一人遊びの時期を経ることを通して初めて、仲間との遊びに目を向けられるようになってきたように思われる。年長2学期以降U夫には親しい友だちもでき、その子を介して他の子とも遊ぶなど、仲間を広げていった。

U夫の一人遊びの時期にも、周りにいる仲間の遊び（大型積み木の家造り、キングブロックの電車）はU夫に活動のきっかけを与えてくれていた。非常に間接的ではあるが、こうした仲間の活動がU夫の変化を促していたことも見逃せない点であろう。

6. まとめに替えて：園における仲間関係の体験

筆者はもともと「保育・幼児教育」の研究という意図ではなく、「生活の場での子ども達の行動」を知りたいという意図で現場におじゃまするようになった。しかし、その後耳にするようになった保育に対する批判は、現場を見させていただいている筆者には意外なものであった。例えば、筆者はある小学校の先生が「幼稚園の教育が変わってから（平成元年幼稚園教育要領改訂のことと思われる）小学校が大変になった」

という感想を漏らされるのを聞いたことがある。また村田と友定(1999)が書き記しているように、「幼稚園や保育園で何をやっているのか、ちゃんとしつけなきゃだめじゃないか、子どもを自由に遊ばせておくだけだからこうなる」という内容の批判も、様々に形を変えて見聞きする。

こうした批判とは全く逆に、保育現場を見て、筆者は「子どもの自由な遊びを中心とするからこそ子ども達がここまで育ってきている」と感じている。例えばU夫が園でじっくり病院ごっこをできずにいたら、U夫は仲間と目を向けることができただろうか？ C子がD子との遊びに出会っていなかったら、C子は仲間からのコントロールにいつまでも従っていたかもしれないと思う。

それに子どもが自由に遊ぶことは、保育者が何もしないで子どもを放任しておくことではない。保育者とはときには積極的に子どもに働きかけ、ときには意識的に距離を取りながら、子どもの遊びを支えている。本稿では仲間関係に焦点を当てたため十分には述べられなかったが、例えばU夫に対し、保育者はU夫がまだ他の子に目が向いていないことを見定め、無理に一緒に遊ばせようとするかわりに、U夫のつぶやきのような言葉を自分も繰り返して言うことで、周りの子どもにもU夫が何をしているのか伝えたり、U夫が大きな病院を作れるように手伝ったりしていたのである。またゆたかの事例では保育者はゆたかのイメージの豊かさを認めて、それを形にするように提案したり、形

にする手助けをしたりしている。

個人としての充実と仲間との生活の充実も、「個か集団か」といったように、あたかも対立するかのようにはしばしば論議される。しかし筆者の実感は全く逆である。例えばU夫は、自分自身と折り合いをつけることで、初めて仲間に向くことができたし、S夫やゆたかは、自分の得意な面を発揮することで、仲間と生き生きと遊べるようになったと思えるからである。

子ども達が幼児期に園という仲間中心の生活の場で自由に遊びながら、仲間との間で体験し、学ぶことは本稿で取り上げた事柄にとどまらない。そうした事例を現場で見るたびに、この時期に保育者達に支えられながら、仲間との間で積む体験は、子ども達にとって、その後豊かな人間関係を築くための大切な資源なのではないかと思えるのである。

引用文献

- 倉持清美, 柴坂寿子 (1996) 幼稚園生活を通した子どもの変容—ある問題を抱えた子どもの事例から—, 保育学研究, **34**, 152-159
 森上史郎, 今井和子 (編) (1992) 『集団ってなんだろう』, ミネルヴァ書房
 村田陽子, 友定啓子 (1999) 『子どもの心を支える』, 勁草書房
 柴坂寿子, 倉持清美 (1999) 園生活の現実として仲間と仲間文化—ある幼稚園児の事例から—, 子ども社会研究, **5**, 109-123